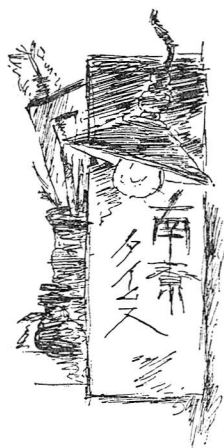


# 森田家文書をめぐって

森田製糸・工女・浩一日記



(一高の南寮新聞)  
「浩一日記」より

新井勝紘

## 村政指導者の文書提供

森田家は、江戸時代、清右衛門（文政五年生）が名主職、次代の浪吉（弘化二年生）が副戸長、そこに養子に入った退蔵（慶応二年生、埼玉県入間郡奥富村出身）は福生村・熊川村組合村（明治二年設置）の村長を五回もやり（通算十三年余）、また東京府会議員などにもなっている、いわば熊川村の名望家である。名主・戸長・村長を三代にわたって歴任している家の文書という点だけを考えても、市史編さんにとっては欠かすことのできない基本文書になるわけだが、その文書が、現当主の森田豊氏（杉並区在住）のご好意で、福生市に提供された（昭和六〇年一月）。

三〇年ほど前に編さんされた『福生町誌』の時代には、

まだ未公開、未発見、未発掘だったこうした地域の基本的な歴史史料が、市史編さんの調査過程でようやくその扉があきかかってきたという感じである。さらに、福生・熊川両地区の近世以来の名主をはじめとした村方三役、あるいは明治以降の戸長、村長、県議、府議、もっと新しいところで町長、議長、町議、市議など、いわば村政をになってきた家や個人の文書が、もっともっと明らかにしてくれる。『福生市史』もより内容を充実させることができるのではないだろうか。すでに教育委員会の福生市文化財総合調査で一九軒の調査を終え、近世・近代あわせて三〇四四点の史料を確認し、目録も作成しているが、やはり根幹史料がまだまだ不十分である。福生の近世から近・現代にかけての地域史を、ポイントをおさえて叙述するためにも、

村政指導者や名望家層の文書が不可欠といえる。

その意味で、森田家文書の提供は、市史編さんにとって朗報となった。

### 村政史料の欠落

ただ残念ながら、全七五四点（近世分六八点含む・書簡除いた分）の中で、支配や村政・村況にかかわる史料が大変少なく、わずかに一五点にとどまった。それも、「村会通知書」や「府会議規則案」などが含まれ、村の「長」としての根本史料はみあたらなかった。「福生村・熊川村組合隔離病舎建物議案」、「福生村・熊川村農会歳入歳出総計予算」などが目立つ程度である。また土地や貢組、普請などについても、明治二年七月に品川県御役所に提出した、熊川村下の河原三〇町余の土地の見分願書や、村内の「山林等級別面積及地価金表」、川除普請に関する史料などが数点みられるだけである。

明治三〇年一〇月から就任し、延べ一三年間も担当した村長職にかかわる史料はほとんどみあたらない。これらほとんど別に保管されており、転居などの際に紛失した可能性もある。文書と一緒に寄贈された「御用書物入、熊川村清右衛門」と記された箱には、ほとんど近世の文書がつまっております、明治・大正期の村長時代の公文書類はまじっていないかった。

### 森田製糸の盛衰

では、近代分六七五点もの文書の主なものは何なのか。その大部分が、養蚕製糸にかかわる史料であった。

森田家は村政担当者であると同時に、養蚕製糸業に本格的に取り組んだ実業家でもあった。農間渡世を脱却し、熊川村でいち早く糸の製造をはじめたのが、森田浪吉である。『福生町誌』によれば、明治二三年（一八九〇）段階で、熊川村で製糸業者はたった一軒だけだったとある（同二七年には八軒に急増している）。浪吉の妻サク（弘化元年生）の履歴書を見ると、明治六年（一八七三）、「森田浪吉ト共ニ始メテ提糸製造ニ従事ス」とあるので、まずこの年から、規模は小さい家内工業的なのではあるが、取り組みがはじまったのだろう。それから四年後、やはり「浪吉ト共ニ坐繰製造ニ従事」とあることから、いよいよ坐繰へ進む。そして二二年一月、早稲田専門学校を卒業し、筑地で外人に英語を学んでいた退蔵と妻美知子は、浪吉・サクの両親とともに製糸業をはじめた。翌二三年三月には、「製糸改良ノ目的ヲ以テ共同荷造所、上水社ヲ組織」（森田退蔵の「履歴書」）している。

森田家にはこうして創業した森田製糸や上水社関係の史料が一括して保管されていたのである。

明治三〇年代後半から昭和のはじめころまでの約三〇年

ほどの間の史料が、集中して発見された。

生繭仕入帳や春繭・秋繭仕入帳など仕入帳関係、糸繭受渡簿、出荷帳、乾燥帳、揚数調査誌、各工場の成績簿、製糸簿などが年度を追って残っている。これらの史料の分析を通して、森田製糸の規模や発展の推移をつかむことができる。また、仕訳帳、決算表、決算報告、仕切書、金銭出入帳、生糸勘定差引書などからは、会社としての粗利益や収益の実態をのぞくことができる。

ただ、昭和四年（一九二九）に森田製糸は多摩製糸株式会社となり、大手の製糸業の片倉製糸の委任をうけて生産するようになり、昭和十五年（一九四〇）、ついに片倉製糸に合併され、多摩工場となる。

小さな家内工業として出発して、約五〇年、半世紀あまりの間、戦争、不景気、好景気という大きな時代の波をくぐり抜けて維持してきた会社が、全国を制覇（朝鮮にも支店がある）した片倉製糸に吸収されてしまうのである。

### 製糸工女の実態

ところで、森田家文書のなかで、なんとといっても圧巻は製糸工女たちに関する史料である。明治四一年から四五年までの四年間に延八四〇名近い工女たちが、熊川、福生はもちろんのこと三多摩の農村から働きにきている。さらに神奈川、山梨などからも集団で採用されているが、その彼

女たちと森田製糸との間にかわされた「雇用契約書」、「年期工女契約書」、「製糸工女契約書」といった類の台帳が数多く残されていた。ひと口に「女工哀史」ということはを使うが、その実態はどうであったのか。その頃の工女たちのおかれていた立場や仕事の環境はどんな状況だったのだろうか。賃金はいったいどの位もらっていたのかなど、具体的事実を知ることができる史料が多い。また「日勤簿」、「皆勤名簿」、「乾燥手日勤簿」など、勤務状況までわかるデータがある。

これらの史料についての詳細な分析は後日にゆずるが、工女たちの採用範囲から待遇や生活の実態までを知ることができる貴重な史料群といえるだろう。

たとえば、神奈川県高座郡大和村鶴間の「土屋ムラ」（一六歳）の契約書は次の様な内容である。

一 手当金拾参円也

但満式ヶ年期

右正ニ受取候也

右者今般貴場へ前記ノ手当金ヲ以テ、製糸伝習ノ為メ工女ニ差遣シ候ニ付テハ、左ノ事項約諾候事

一 雇用期限ハ明治四拾壹年式月十五日ヨリ明治四拾参年式月十五日迄、満式ヶ年トス

二 約定期限中ハ如何ナル事項出来スルモ御解雇ヲ求メザル事

但、結婚又ハ不可抗力ノ原因ニ依リ後來勞務ニ堪ヘザルトキハ、總テ示談ノ上処理可致事

三 約定年限中病氣其他已ムヲ得ザル事故ニテ欠勤致候節ハ、満期後前契約ト同時相互ノ条件ヲ以テ、其不足日ヲ補充可致事

四 約定年限中逃亡又ハ他ノ工場へ転勤スル等其他悪意ヲ以テシタル不法ノ行為ヨリ勞務ヲ供セザルトキハ、違約ノ弁償トシテ手当金ヲ申受ケサルハ勿論、初年分賄費トシテ金叁拾円、其事実發頭後十日以内ニ納付可仕事、但シ此場合ニ於テハ既ニ受取りタル手当金ハ賄費ト同時ニ現金ヲ以テ返納可仕事

(中略)

六 貴物ノ御規則及習慣ハ堅ク遵守致シ、品行相慎ミ専ラ業務ヲ勉勵可仕候事

二年間の契約金一三円であるので、年六円五〇銭ということになる。それにこの手当金を全額本人がもらう訳ではなく、契約の時点で、「手当金ノ借用金」として何円かを保証人としての親がもらっていらっしやうのが通例である。

この契約期間中は、「如何ナル事項出来スルモ」辞めないうこと、もし途中で黙って辞めたりした場合は、弁償として手当金とプラス住み込みの賄料として三〇円を、十日以内におさめることなど、非常に厳しい雇用契約となつている。このような工女たちと森田製糸の間の契約内容などに

ついては、今後、もう少し分析し紹介してみたい。

## 二中から一高時代の「森田浩一日記」

森田家文書の中で、もうひとつ注目したいのは、「森田浩一日記」(明治三六年〜大正二年)である。退蔵・美知子の長男、浩一(明治二四年二月一日日生)が、十代から二〇代にかけて書きしるしていた日記で、いわば多感な青年時代の『青春日記』といえるものである。残念ながらかれは、二九歳という若さで米国バルチモア市で客死(大正二年二月八日)してしまふのだが、二中(現立川高)から一高(現東大)へと、秀才エリートコースへ進んだ、学園時代の日記でもある。立川まで通った二中時代、一高の寮時代と、生活の場はかわつてはいるが、毎日その日の行動を刻明に記している。

時代は白露戦争(明治三七年)、講和条約反対をめぐつての日比谷焼打事件(同三八年)、足尾鉞毒事件(同四〇年)、さらに戊申詔書が出され(同四一年)、大逆事件(同四三年)、韓国併合(同四三年)、東京市電ストライキ(同四四年)と社会状況の厳しい年が続くさなかの学生時代、かれはそこで何を学び、何を体験したのか。親・兄弟・親戚・友人などとの交流はもちろん、福生という地域社会とどうつながっていたのだろうか。

ひとりの青年の日記の中から、明治末年から大正のはじ

めにかけての歴史の断面を切りとることができないだろうか。それはまた、福生という地域社会を足場に、大きく飛びたとうとし、ついに未完で終わったノンフィクションドラマでもある。森田浩一の残した日記には、私のこうした勝手な筋立てに答えるに、あまりあるものがある。

### 矢内原忠雄との交流

たとえば、矢内原忠雄との交流である。内村鑑三門下の無教会派クリスチャンで、軍部の戦争政策批判から東大を追放され、戦後、東大総長になった経済学者矢内原と森田は、一高時代同じ寮で生活した友人であった。日記にも、矢内原の名はしばしば登場する。矢内原と一緒に一高に入った三谷隆信（のち宮内庁侍従長）は、「そのころの一高は新渡戸稲造先生を校長にいただき、自由、清新の空気に満ち、私のように官僚的でないかの中学から来たものには、おどろくばかりの理想境であった。ことにすばらしかったのはよい友人を得たことである。」（「わが友・矢内原君」、『矢内原忠雄——信仰・学問・生涯』所収、昭和四三年）と記しているが、森田も矢内原・三谷と同じ年（明治四三）に一高に入学し、矢内原とは一年間、「南寮十番」で隣り同志となった。森田の日記には、この寮生活の日常が詳細に記されている。矢内原の学生時代を知る上でも、興味ある記事がしばしばみられる。

なかでも、一九一〇年（明治四三）の日記にはさみこまっていた寮のオリジナル新聞『南寮タイムス』（同年一月三日発行）は、同室の井川韓人が編集しているが、興味深い。「南寮十番は秀才の室よコラ〜、無試験入学五、六人」（矢内原も無試験）、「健児のあたまを叩いてごらんコラ〜、秀とひびいて才と鳴る」（中略）、「前田仙ちゃんに森田の平君、そろいもそろうたべんけう家」というザレ歌に登場する森田は、誰しも認める勉強家だったようだ。

（森田と前田仙太郎は同室、隣室は矢内原と小池四郎）

ともかく、森田浩一の人物像をこの日記からうかがえば、  
らせてみたい意欲がわいてきた。

（あらい・かつひろ 福生市史編集専門委員 熊川在住）